

大阪商業大学学術情報リポジトリ

コンドルセ『教育に関する五つの覚書』
プーフェンドルフ『自然法と万民法』

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2022-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森岡, 邦泰, MORIOKA, Kuniyasu メールアドレス: 所属: |
| URL | https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1285 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



コンドルセ『教育に関する五つの覚書』 プーフェンドルフ『自然法と万民法』

森 岡 邦 泰

- I コンドルセ『教育に関する五つの覚書』
- II プーフェンドルフ『自然法と万民法』

I コンドルセ『教育に関する五つの覚書』

本資料は、これまで筆者が自己の研究に役立てるため部分的に翻訳してきたものである。一つ目は、コンドルセの『教育に関する五つの覚書』の冒頭部分の翻訳である。コンドルセについては、本論集に「コンドルセの初期経済思想」(第13巻第3号、通号187号、2018年)を寄稿したが、本翻訳は、筆者のコンドルセ研究の一環である。コンドルセの著作のうち現在、ユゴーとかゾラのような一般読者向けのペーパーバックのシリーズに入っているのは、この著作と『人間精神進歩史』の二つであり、後者については既に翻訳が二つある。欠けているのは前者なので、一部でも翻訳を載せることは意義があることだと思われる。底本には Condorcet, *Cinq mémoires sur l'instruction publique*, Paris, Flammarion, 1994 を用いた。

第1の覚書

社会は人民に公教育の義務がある

1. 権利の平等を現実的なものにする手段として

公教育は市民に対する社会の義務である。

本当に市民は同じ権利を持っていると、宣言したのだろうか。もし、精神能力に格差があることが、大多数の人々にこの権利を十全に享受することを妨げているとすれば、本当に法律は、永遠の正義のこの原理を尊重したのだろうか。

社会の現状は、個人の安寧に共通の諸力を協働させることによって、自然の格差を必然的に減少させる。しかしこの安寧は、同時に各人がその同胞と持つ関係にいつそう依存し、格差の結果はそれに応じて増大するだろう、もし精神能力の違いから生まれる格差を、幸福と共通の権利の行使に関して、もっと弱めるか、ほとんどなくさないか。

この義務は、従属をもたらすいかなる格差も存続させないことに存する。

平等な教育は自然の恵みたるいっそう幸福な素質に恵まれた人の長所を増加させないことはあり得ない。

しかしこの長所が実際の従属を引き起こさないためには、また誰もが他人の理性に盲目的に従属することなく、法律が享受を保証する権利を自分で行使するのに十分教育されるためには、権利の平等を維持するだけで十分である。従って、何人かの優秀性が同じ利点を持ってなかった人にとって害悪となるどころか、それはみな幸福に貢献するだろう。そして理性の光としての才能は、社会の共通財産となるだろう。

こういうわけで、たとえば、書くことができない人、算術を知らない人は、実際、より教育を受けた人に従属し、絶えずその人を頼らざるを得ない。その人は、教育からこの知識を得た人と対等ではない。その人は、同じ権利を、同じ広がりと同じ独立性をもって行使できない。所有権を規定する最初の法を教えられていない者は、それを知っている者と同じようにこの権利を享受することはない。彼らの間で生じる議論で、彼らは等しい武器で戦っているのではないのだ。

しかし生活の中で使われる必要不可欠な算術の規則を知っている人は、数学の才能を最も高度に持っている学者に従属することはないし、その才能はその人にとってきわめて実際に有益なものとなるであろう。しかも彼の権利を享受することを妨げることはあり得ないのである。市民法の要綱を教えられた人は、最も聡明な法律家に従属することはない、その知識は彼を助けるだけで、従属させることはない。

教育の不平等は専制の主要な源泉の一つである。

無知の時代には、弱く不確かな理性の光は、力の専制と結合していたが、それも、しかしごく少数の階級に独占的に集中されていた。僧侶、法律家、商業活動の秘訣を知っている人、少数の学校で養成された医師さえも、あらゆる大砲で武装した兵士に劣らずこの世界の支配者であった。これら兵士の世襲の専制政治は、それ自体、火薬の発明前は武器の扱いの技術に特化した訓練が彼らに与えた優越性に基づいていた。

こうしたわけで、エジプト人とインド人のもとで宗教の奥義と自然の神秘の知識を我が物にしていたカーストが、これらの不幸な人民に、人間の想像力が及ぶ限りのこの上ない絶対的な専制政治を行うことに成功したのである。またこうしたわけで、コンスタンチノーブルでスルタンの軍事専制政治がコーランの法の特権的な解釈者の信用の前に屈服せざるを得なかったのである。おそらく今日ヨーロッパの残りの地域では、同じ危険を恐れる必要はない。というのも、そこでは理性の光は世襲のカーストの中にも、排他的な同業組合の中にも集中しえないからである。同じ国民の二つの部分に大きな間隙をおく神秘的な聖なるこれらの教義はもはや存在し得ない。しかし誘惑しようとするペテン師のおもちゃになってしまい、自分で自分の利益を守ることができない人間は、盲目的に導き手に身を任せてしまい、その導き手について判断することもそれを選ぶこともできないほどの無知のこのようなレベ

ルである。この無知の結果たる、盲従的な従属のこの状態は、その大半については、ほとんどすべての民族のもとで存続しており、彼らにとってそのとき以来自由と平等は法典で読まれるのを聞く言葉でしかあり得ず、彼らが享受することができる権利ではない。

2. 道徳感情の違いから生じる不平等を減じるためには

均等に拡がった全般的な教育が唯一の解決策となるようなもう一つの不平等がまだある。法がすべての人間を平等にしたとき、彼らをいくつかの階級に分かつ唯一の区別は、彼らの教育から生まれる区別である。それは理性能力の違いだけでなく、意見、嗜好、感情の違いに起因するのであるが、そうした違いは教育の必然的な結果なのである。もしいかなる公的の制度も金持ちと貧乏人を教育によって近づけなければ、金持ちの息子は貧乏人の息子とは同じ階級に属さない。そしてより念を入れた教育を受ける階級は必然的により温和な習俗を、より繊細な誠実さを、より良心的な正直さを持つだろう。彼らの徳はより純粹となり、彼らの悪徳は、反対によりましになり、より野蛮でなくなり、より直せないものでなくなるだろう。だから実際の区別が存在するだろう。それを消失させることは法のなし得ることではない。またその区別は、理性能力を持っている者とそれを奪われた者との真の分離を確立することによって、理性能力を必ず一方の者の権力の道具とし、みな幸福の手段にはしないだろう。

従って、できる限り権利の平等を事実において広める社会の義務は、各人に人間に共通の機能、すなわち、家族の父としての、市民としての機能を果たすために、そしてそのすべての義務を感じ、知るために必要な教育を与えることにある。

3. 社会において有用な啓蒙の光の総量を増すために

人間が教育によって、正しく推論でき、提示された真理を把握でき、誤りの犠牲にされるのが望まれているその誤りを退けることができるようになればなるほど、啓蒙がますます増進し、いっそう多くの個人の上に広まるのを見る国民は、よき法、賢明な統治、本当に自由な体制を、得られまた維持できると期待するに違いない。

従って、また、彼らの知性の力と彼らが学ぶのに用いる時間が彼らに到達することを可能にする知識を得る手段をすべての人に提供することは、社会の義務である。そこから、おそらく、生まれつきの才能をより多く持った人と、独立した財産を持っているため勉学により多くの年月を捧げる自由を持っている人に好都合な違いが出てくるだろうが、この不平等がある人を他の人に従属させなければ、この不平等が一番の弱者に教師を与えなくても支援を提供するなら、それは悪でも不正義でもない。確かに啓蒙された人間の階級を広めることを恐れ、その啓蒙の光を増すことを恐れる者は、悪しき平等への愛であろう。

社会はさまざまな職業に関連した公教育の義務がある。

1. さまざまな職業に携わっている人たちの間のいっそうの平等を維持するために

社会の現状では、人間はさまざまな職業に分かれており、その職業一つ一つが特有の知識を要求する。

これらの職業の進歩は共通の福利に貢献する。そして、そうした職業への嗜好を持っているか、その能力があるため、その職業に就くことが求められている人たちにそこへの道を開くことは、実際の平等のために有用なのである。しかし、公教育がないため、彼らの貧困のせいで、そこから絶対的に遠ざけられるかその仕事で凡庸のままとどまざるを得ず、従って、従属させられるのである。それゆえ公権力は、その義務の中に、こうした知識を獲得する手段を約束し、容易にし、増やす義務を含めなければならない。この義務は、公職と見なされうる職業に限ったものではない。それは人々が自分自身の利益のために行う職業にも、その職業が全般的な繁栄に及ぼすかもしれない影響を考慮せずに、拡張される。

2. さまざまな職業をどれも同じくより有益にするために

このように教育を平等にすれば、技芸の完成に貢献するだろう。それは、財産の不平等がそれらの職業に携わりたいと思う人たちの間に置いた不平等を破壊するだけでなく、より広範な別の種類の平等を、すなわち、福利の平等を確立するだろう。もしすべての人が自分の必要を容易に満たし、彼らの住居、衣服、食物、生活のすべての習慣に、衛生的なこと、清潔さ、そして便利さと楽しみを結びつけることができれば、何人かの人々が、彼らの財産に享楽を求めることは、ほとんど重要ではない。ところでこの目的を達する唯一の方法は、技術の、しかも最もありふれた技術の生産に一種の完成をもたらすことである。そのとき、少数の金持ちのためにのみ向けられた生産における、より大きな度合いの美もしくは、優美さ、上品さが、それを享受しない人たちにとって害悪となるどころか、競争により活性化した産業の進歩を助長することによって、彼らに有利にさえなる。しかし、もし技術における優位をより一貫した教育を受けることができた何人かの人だけが持ち、ほとんど平等な教育で生まれつきの才能がもたらすことができた卓越性が優位をもたないなら、そうしたよきことは生じないだろう。無知な労働者は、それ自体に欠陥のある物品しか生産しない。しかし、才能によってしか劣っていない者は、技術において究極の才能を要求されないすべてのものにおいて競争に耐えることができる。最初に作ったものは劣悪だ。二番目に作ったものは、三番目に作ったものよりよくはない。

3. いくつかの職業がさらす危険を減少させるために

さらにこの一般的教育の結果として見なせるのは、さまざまな職業をより不健康でなくするという利点である。それらの職業の多くがさらす病気から守る手段は、通常想像されるよりもっと単純で知られている。大きな困難は、とりわけ、自分の仕事を型どおりするだけで、どんなに小さな変化にさえ当惑し、じっくり考えるだけで得ることができるこの柔軟性を欠いているような人々にそれらを採用させることである。人々は、彼らの利益を少なくする時間の損失と彼らの生命を保証する用心との間でどちらかを選ぶことを余儀なくされて、現在窮乏するよりも遠くの不確かな危険のほうを選ぶ。

4. 人々の進歩を促進するために

一般的教育はまた、さまざまな職業を修める人たちとそれを用いる人たちを、この多くの小さな秘訣から解放する手段である。ほとんどすべての技術の実践がこの秘訣に毒されてお

り、その進歩を止め、不誠実とペテンに永遠の糧を提供しているのである。

結局、もし最も重要な実践上の発見が一般的に、この技術を指導する規則を持つ学問の理論によっているなら、職人たちだけが探求する考えを持つ多くの細かい発見がある。なぜなら彼らだけがその必要を知り、その利益を感じているからである。さて彼らが受ける教育は、この探求をより容易にするだろう。そして特に彼らが路頭に迷うのを防ぐだろう。この教育がないため、彼らのうちで自然から発明の才を授けられた者は、その才能を恩恵と見なすどころか、しばしばそこに破滅の原因しか見いださない。彼らの発明の果実によって財産が増えるのを見る代わりに、彼らは不毛な探求にそれを消耗する。そして間違った道をとったため、彼らの無知のためその危険を知り得ず、終いには狂気と貧困に陥る。

社会はさらに人類を完成させる手段として公教育の義務がある

1. 天分を持って生まれたすべての人にそれを伸ばすようにしてやること

すべての種類の真理のうち続く発見によってこそ、文明化した諸国民は、野蛮と、無知および偏見に伴う災禍を免れてきた。新たな真理の発見によって、人類は完成への歩みが続けるだろう。真理のうちのいかなるものも、ほかの真理を上回る手段を与えないものはないので、そしてまた、その歩みの一步ごとに、乗り越えるのがより困難な障害の前に我々を置いて、同時に新たな力を我々も伝えるので、この完成にいかなる終わりも定めることはできない。

だから、さらに思弁的な真理の発見を助長することは、完全性への、その結果、自然が渴望させることを可能にする幸福へのさまざまな程度に次々と人類を至らせる唯一の手段としての、真の義務である。この義務は、善がいつまでも続くものであり得ないだけに、なおさら重要なのである。もし最善へ向かって進歩をしなければ、そしてまたもし完全性へ向かって歩むか、情念と誤謬と状況の避けられない連続的な衝撃によって後方へ引きずられていく存在にさらされるか、いずれかをしなければならぬとすれば。

これまでのところ、ごく少数の個人がその幼少期に、その生まれつきのすべての能力を発展させることを可能にする教育を受けている。子供の百分の一になるかならないかが、この利益を得られることに満足している。そして経験が証明したところでは、財産がなく教育を受けられず、その後幸運な偶然に助けられて彼らの天分の力で学ぶことができるようになった人たちは、本来彼らのいるところより下にとどまっている。何もこの初等教育の欠点を埋め合わせることはできないものはない。初等教育のみが、方法の習慣を与えることができ、またただ一つの学問で、それのみが生まれつきの才能で到達することが期待できるどんな高みまでも到達するのに必要なこのいろいろな知識を与えることができる。

それゆえ、いかなる才能も気づかれずに漏らすことがなく、金持ちの子供だけにこれまで留められていたすべての援助を提供する公教育の形態を持つことが重要であろう。それは、無知の時代にさえ感じられた。そこから貧民の教育のための多くの施設ができたのである。しかし、これらの施設は、その誕生を見届けた時代の偏見によって汚されており、公教育が公共の恩恵となり得る諸個人にだけそれを用いるためのいかなる配慮も払っていない。すなわち、それは一種の宝くじであり、何人かの特権を得た者に上の階級に昇る不確かな利益を提供するのである。これらの施設は、そこで恩恵を受けた者の幸福にきわめてわずかしが貢

献せず、全体のためには全然役に立たなかった。

天才があらゆる障害にも拘わらず成し遂げることができたものを見るにつけ、もしもっとよく行われた教育が少なくとも発明者の数を百倍にしていたら、人間精神が遂げたであろう進歩について判断することができる。

同じ点から出発した十人の人間はある科学で十倍以上の発見をすることができないだろうし、特に、それら十人の一人が単独だった場合よりも十倍も遠くへ進むことはないだろうということは本当である。しかしさまざまな科学の本当の進歩は、前進することに限られるわけではない。それはまた同じ点の回りにもっと広がることにも、そして同じ方法によって、同じ原理の結果によって、見いだされたいっそう多くの真理を集めることにも存する。しばしば、さらにその先に進むことがあるのは、その原理を使い尽くした後でしかない。この観点からすると、これら二次的な発見が真の進歩をもたらす。

ある同じ分野の真理の探求に携わっている人を増やすと、その方面の新しい真理の発見の期待が増すことを見て取らなければならない。なぜなら彼らの精神の違いが困難の違いにより容易に対応するからであり、我々の探求の対象やその方法さえも選ぶ際にきわめてしばしば影響を与える偶然が、その際もっと有利な組み合わせを生み出すに違いないからである。さらに方法を作り出したり新たな経歴を切り開くのに向いた天才の数は、細かい発見を期待できる才能を持った人よりもはるかに少ない。そしてそうした天才の出現は、しばしば中断される代わりにうち続けば、より多くの若い才気ある人たちに彼らの天命を全うさせる手段を与えてしまうと、それだけ早くなるだろう。結局、これらの細かい発明は、特に彼らの専心によって、有用となるのである。発明をする天才と、その発明をみな役に立つ生産に役立たせる実践家の間には常に間隙が残っていて、それを見て取らなければならない。その間隙は、一段下のこうした発見なくしてはしばしば乗り越えることができないのである。

かくして教育の一部が普通の人間に天才の仕事を活用させ、彼らの必要のためにせよ、彼らの幸福のためにせよ、それをを用いさせる一方、この同じ教育の別の部分は、自然によって準備された才能を活性化させ、障害を取り除き、彼らの歩みを助けることを目的とする。

2. 先行する世代の教育によって新しい世代を準備することによって

一様に普及した公教育から期待されるに違いない種類の完成性は、生まれつきの能力が常に等しい諸個人に、おそらく彼らが受け容れる余地のあるあらゆる価値を与えるにとどまらない。教養が諸々の世代それぞれ自体を改善することができ、諸個人の能力における完成が子孫に伝達可能だと信じることは、一見してそう見えるほど、空想的ではない。経験がそれを証明さえしたように見える。文明化を逃れた諸民族が、啓蒙された国民に囲まれていても、教育の等しい手段が彼らに提供されるときに、啓蒙された国民の水準まで上がるようには見えない。人間の必要のため家畜の品種の観察は、この見解に好都合な類推を提供する。与えられる訓練 *éducation* は、その身長、外見の姿、純粋に体の資質を変えないだけではない。それはこのさまざまな品種の先天的な素質、性格に影響を及ぼすように見える。

従って、もしいくつもの世代が一定の目的に方向付けられた教育を受けたなら、またもしそれら世代を成す人たちの各人が自分の精神を勉学によって涵養したなら、続く世代は教育を受け容れるもっと大きな能力と、それをを用いる適性をもっと持って、生まれるだろう。魂

の本性についてどのような意見を持っていようとも、あるいはどのような懐疑論にとどまっていようとも、感覚的な事物から最も遠いように見える思想にまさに必要な介在する知的器官の存在を否定することは困難だろう。深遠な省察にふけた者たちの中で、これらの器官の存在がしばしば彼らを感じる疲労によって示されなかった者はいない。それらの器官の力あるいは柔軟性の程度は、体の残りの部分から独立してはいないとはいえ、しかしながら、身体にせよ感覚にせよ、それらの健康にも活力にも比例していない。かくして我々の能力の強さは、少なくとも一部は、知的器官の完全性に結びついている。この完全性は、我々にその存在を伝える身体の中での状態から独立しているわけではないと思うのは当然である。

この何世紀も続く長い間に蓄積された膨大な量の真理を、際限のない完全性に対する障害と見なすべきではない。それら真理を一般的な真理に還元し、ある単純な簡単な体系に従って秩序づけ、より正確な公式による表現に簡約する方法もまた、同じ進歩を受け容れる余地がある。人間精神が真理を発見すればするほど、人間精神はそれら真理を覚え、より大きな数で組み合わせることができるようになるだろう。

もしこの我々の種族の無制限の完成が、私がそう信じるように、自然の一般的法則ならば、人間はもはや、つかの間の孤立した生存に限られた存在として、そして自分自身にとっての幸福と不幸が交互にやってきた後、また自分の周りにたまたまいた人たちにとってよいことと悪いことが交互に起こった後、消えてしまうよう宿命づけられた存在として、自らを見なすべきではない。人間は大いなる全体の能動的な一部となり、永遠の作品の協力者となる。人間は、その人物の思い出が消え去った後でも、空間の一点における一瞬の生存の中に、その人の仕事によって、すべての場所を包含し、すべての時代と結びつき、なお長い間活動することができる。

我々は、我が啓蒙の光を自慢している。しかし、我々の見解、習慣において、忘却された二十の民族の偏見の残りを見ずして、諸社会の現状を観察できるだろうか。それら民族の誤謬のみが時代から逃れ、革命を生き抜いてきた。たとえば、私は次のような国民を挙げることができよう。すなわち、哲学者と時計は存在するが、しかしながら、まだ書く技術がなかった頃、必要から導入された制度を人知の傑作と見なすような国民、そして公的な行為において時間を計るのに未開民族で生じた最初の手段を用いているような国民。どれほど膨大な距離が完全性の終極から我々を隔てている感じないことができようか。それを我々は遠くに見ているのであり、天才がそこへの道を我々に開き平らに整えたのであり、そこへと疲れを知らない活動が我々を導いているのである。一方我々が子孫の目には、さらに広大な空間が開けてくるに違いないのである。それにまた、残っている打破すべきこと全部に、いやむしろ近い将来我々の希望にもたらされるすべてのことに、驚かないことがあるか。

公教育は、時代がもたらすに違いない変化に諸国民を備えさせるためになおのこと必要である。

自然の一般的な法則によって引き起こされようとも、長く続けられた事業の結果生じようとも、ある国の気候変化、土壌の変化、また新たな耕作、技術における新たな手段の発見、労働力を省き労働者に別の仕事を探させることを強いる機械の導入、そして最後に人口の増

大もしくは減少、これらのことが、市民間の関係にせよ、外国の国民との関係にせよ、多かれ少なかれ重要な革命を生み出すに違いない。そこから帰結するかもしれないことは、その恩恵に与る準備をしなければならない新たな良いことか、あるいは修復するか、それすか、予防することができなければならない害悪である。従って、それを予感するか、前もって習慣を変える準備をしなければならないだろう。同じ格率でいつも統治され、その制度が変化に対して適応するようになっていないような国民は、時代によって引き起こされた革命の必然的結果として、その繁栄を保証していた同じ見解、同じ手段の破滅が生じるのを目にするだろう。旧弊に身を委ねた国民は、害悪が多すぎることで、それを矯正することができるかもしれないが、一般的教育によった国民は、理性の声に従うにふさわしくなったのであり、習慣が愚かさにかたくなに課した鉄のくびきに従うことはなく、それをしばしば予防さえするだろう。ちょうど個人が自分が生まれた場所から離れることを余儀なくされると、そこにとどまっている人よりも多くの着想を得る必要があり、遠ざかるにつれて、新たに資産をこしらえなければならぬように、同様に、何世紀も先へ進んだ国民は教育が必要で、その教育は、絶えず刷新され修正されることによって時代の歩みに従い、しばしばそれに先んじ、決してそれと対立しないようなものだ。

人類の全般的な完成によってもたらされる革命は、間違いなく、理性と幸福へと人類を導かなくてはならない。しかし、どれほどの一時的な不幸によって、それを購ってはいけないのだろうか。もし全般的な教育が人々を近づけあわせないのなら、そして常に不均等に広がる啓蒙の進歩が、国民間の貪欲と策謀の永遠の戦争の糧となるなら、時代はどれほど後退したことになるだろうか。それはちょうど同じ国民 *people* のさまざまな階級間の争いのように。共通の幸福の基礎である、必要と手助けの兄弟のような相互依存関係によってそれら階級を結びつける代わりに。

公教育を三つの部分に分けること

こうした考察から、はっきりと区別された三種類の公教育の必要性が生じるのが見られる。まず、共通教育で、提案しなくてはならないのは、

1. 各人に、その能力のレベルと自由にできる時間に従い、その人の職業や嗜好が何であれ、すべての人間が知ることが適切なことを教えること。
2. 各主体の個別の素質を、全体の利益のためにそれを用いることができるように、それを知る手段を確保すること。
3. 生徒が就くことになっている職業が必要とする知識を生徒に用意すること。

第二の種類の教育は、さまざまな職業について、全体の利益のためにせよ、それに従事する人の個人的な幸福のためにせよ、それを完成するのが有益な職業に関連した学習を目的とする。

最後に三番目の種類の教育は、純粹に学問的なもので、新たな発見によって人類を完成させるよう自然から運命づけられた人々を養成しなければならない。そしてそれによって、それら発見を容易にし、加速し、増やさなくてはならない。

児童教育と成人教育を、それぞれの教育において、区別する必要性

これら三種類の教育は、さらに二つの部分に分かれる。実際、まず子供たちが自分の権利を完全に享受するようになるときに、また就くことになっている職業を独立して行うようになるときに、彼らを知ることが有益なことを教えなければならない。しかし、人生全体を包含するはずの別の種類の教育がある。経験は、進歩をすることと喪失をすることとの間に中間はなかったということを証明した。人間は、教育を終えると、その理性を強化することも、新しい知識でそれまで得たであろう知識を豊かにすることも、誤りを正すか、受け容れたかもしれなかった不完全な概念を修正することも続けられないだろうから、初期の数年間の勉強の成果もすぐに消え去ってしまうのを見ることになるだろう。一方、時間が初期の印象の痕跡を消してしまうだろう。そうした印象は他の勉強によっても精神それ自体によっても刷新されず、勤勉の習慣を失って、その柔軟性もその力も失うことになるだろう。生存に必要な職業が最小限の自由を残すような人たちにとって、教育の時間は、彼らが教育に充てることができるすべての時間に、はるかに及ばない。要するに、新しい真理の発見、既に知られている真理の発展または進歩か応用、情勢の推移、法と制度の変化は、徳育の啓蒙に新たな光を付け加えることが有益であり不可欠であるような状況をもたらす。従って、教育が人間を作るだけでは十分ではない。教育が作った人間を、教育は保ち続け完成させ、啓蒙し、誤謬から守らなくてはならない。真理の殿堂の扉はすべての年齢に開かれていなければならない。もし両親が賢明で子供の魂に真理の殿堂の神託を聞く準備をさせたなら、子供たちは常にその声を聞き分けることができ、その声をベテンの詭弁と混同することにさらされないようにしなければならない。だから社会は、自己教育の容易で簡単な手段を、経済的にそれを手に入れることができない人のために、また知っていれば役に立つ真理を初等教育では自分で識別し探すことができなかつた人たちのために、準備しなければならない。

教育を、生まれつきの能力の程度によって、また学ぶのに用いることができる時間に応じて、いくつかのレベルに分ける必要性

子供たちは、彼らの両親の富と、彼ら家族の置かれた状況と、運命づけられた身分に従って、教育に充てる時間が多かたり少なかつたりする。すべての個人は等しい能力を以て生まれるわけではない。同じ方法で同じ年数教育を受けた人がすべて同じことを学習しないだろう。能力と才能の劣る者により多く学ばせることを求めれば、この不平等の結果を減少させるところか、それを増大させるだけになるだろう。有益なのは、学んだ内容ではなく、記憶に留めた内容である。とりわけ、熟考によるにしろ、習慣によるにしろ、自らのものにしたものである。

各人に与えるのが適切な知識の量は、勉強に充てることができる時間だけでなく、その注意力、その記憶力の大きさと持続性、その知性の優秀性と的確さにも比例しなければならない。同じ観察は、特別な仕事を目的とした教育、本当に科学的な研究を目的とした教育にも同じように適用されうる。

さて、公教育はそれを同じ時間で受けるすべての人にとって必ず同じである。従って、この違いを考慮することができるのは、ただ計画に沿って段階づけられたさまざまな教育課程を設立することによってだけであり、それは、各生徒が教育に用いることができる時間に従い、レベルのより上かより下かの課程をくまなく受講できるように、そして学ぶのがより容易になるようにするためである。三種類の教育機関が全般的教育のために十分に思われる。そのうちの二つは、さまざまな職業か、学問に関係する教育である。

これらの教育機関のそれぞれが、それが行う教育が包含しうる対象の数を減らすことを、また各人の限界をより遠くかより近くに置くを、容易にできるようにすることによって、その機関は、さらにさまざまなレベルの教育に適合することもできる。そのとき、賢明な父親かその機能を果たす者は、生徒のさまざまな資質と彼らの教育の目的に、生まれつきの素質か啓蒙されようという意欲か興味に沿って、共通の教育を適用することができるだろう。人間のために設立された教育においては、各人は、同様にその必要に応じた教育を見つけるだろう。そのとき、すべての人が公平に受けることになるはずの教育は、本性が富に恵まれた少数の人のために考え出されたものではもはやないだろう。

Ⅱ プーフェンドルフ『自然法と万民法』

もう一つは、プーフェンドルフの『自然法と万民法』の冒頭部分の翻訳である。これも以前、本論集（第7巻第3号、通号163号、2012年）で「プーフェンドルフの『義務論』一考」を書いたことがあったが、その際必要部分を一部訳していたので、それを補ったものである。これも本邦初訳である。底本には、最近刊行された新しい全集版を用いた。

Samuel Pufendorf, *Gesammelte Werke, Band 4.1, De jure naturae et gentium*, Hrsg. von Frank Böhling, Berlin, Akademie Verlag, 1998.

また次の英訳を参照した。

Samuel Pufendorf, *De jure naturae et gentium libri octo*, the translation of the edition of 1688, Vol. 2, New York, William S. Hein & Co, 1995.

献辞と序文は省き、本文からである。

第1巻、第1章

第1節 序

もし、第一哲学が、その本来の性質の全幅を満足したなら、事物の最も包括的な定義を与え、それをいくつかのクラスに適切に配置することことは、第一哲学が目指すところであった。その際、さらに事物のそれぞれの類の性質が、一般にまたその定義の条件となるのである。自然の事物のクラスにおいては、これまでのところこの誉ある学科に従事した人たちは、十分このことを実行したように見える。しかし、実のところ、彼らは道徳的存在については、それと同じように、その位階に応じて完全ではなかった。それどころか、彼らの多くは、理解さえしていなかった。せいぜい中身がないかのごとく軽く触れただけの者もいたし、あるいはひとときも頭に浮かばなかったかであった。しかしそうしたものの本性を人が最大限理解することは適切であり、人間にはそのようなものを生み出す能力が授けられているのであって、生涯にわたりそうしたものの力が全般的に行き渡っているのである。我々の計画にとって十分だと思われる限り、ここで多くの人に無視された学説を提示する必要性が我々に課せられているのである。

我々がこれから与える道徳的（精神的）事物の定義が読者を曖昧さや新奇さによって戸惑わせないようにした。この種のものが通俗的な書物で取り扱われるのは、おそらくよりまれであろうから。もしこうした定義の多くを、上品な文献で育った人たちが嫌うなら、そして知らないラテン語の語彙に眉をひそめるなら、我々が彼らに許しを乞うので、もし我々が彼らの上品な定義について時に彼らがぺちゃくちゃしゃべるのに耐えるなら、彼らは、我々が言葉の精華よりも事物の若干の正確さのほうを考慮することを支持する結果になる。なぜなら、もし退屈な回りくどい表現によってより大きな曖昧さに言葉を包むことを我々が望まないとするれば、これらのものをどのような方法でもっと十全に表現できるか、我々はまだ分かっていないからである。キケロの次の言葉が、新奇さの言い逃れから我々を守る。すなわち、「新奇な事柄に新奇な名前をまともさなくてはならない。けれども、いささかでも学を修

めた人なら誰もそれに驚いたりはずせぬに、どの分野の学術でもそれぞれの扱う対象を表す用語が定められているから、ましてその用途が身近でも一般的でもない分野なら、どれにも多くの聞き慣れない語があるものだと考えるだろう。】(『善と悪の究極について』第3巻)¹⁾。それから最初に持ってこられたのはリベラルアートの例、次いで技術的な例に言葉は従う。「しかし、それは哲学者がいつそう行わねばならない。哲学とは生の技術であり、論究にあたって中央広場から言葉を拾ってくるわけにはいかないからである。」²⁾「私が扱う題材は、快さを与えるものではなく、ただ人を教えることにしか適さない。そして私が、時おり、外国語からいくつかの単語を借用しなければならなくなるのは、主題のせいで、詩人の拙さのためではない。ある事柄を表わすには、最初からそれにあてられた用語によるほかない。そんな事柄もあるものだ。」(マニリウス『アストロノミコン』第3巻)³⁾。しかし、もしこれら優美でない言葉をいかようにも広めることができないなら、それらを省略して、直ちにより明確な言葉へと行くことができるだろう。

第2節 人間の生活は道徳的(精神的)存在によって規制される

従って、宇宙が構成される全体のすべての事物が、その宇宙の原理に基づいているのであるが、全能の神はその原理にそれぞれの事物の実存を形成することを割り当て適合させたのであり、かくしてそれら事物のどれもその性質、——それは実体の配置と適性からあふれてくるものだが——、そうした性質を持つことが見受けられる。また確かにあるものの場合、神によって生み出された力の尺度に従った活動が流れ出るのが見受けられる。そうしたものを我々は、自然と呼ぶ習慣がある。最初は、自然という語彙で、創造された事物全体が描かれる習慣があったが、その後は、ともに生まれた力から流出する事物の様相と活動もそう描かれた。その力によって無数の多様な運動が生み出された。この宇宙のすべてのものが、それによって動かされていることを我々は認識している。そしてほかのは、まったく感覚がないか、直接的な感覚しかないか、わずかに精妙な思考作用を持っているかのものを作動させているもので、それはただ自然の本能によって動かされており、それ自体によって見いだされた方法では、その活動を決して支配するすべを知らなかった。しかし人間には、素晴らしい身体の適性以外に、特別な精神の光が与えられており、その作用によって事物をより正確に理解し、それらを互いに比較し、より知っていることから知られていないことを推論し、それらの調和について判断することができる。その結果、確かにいつもそれらの運動を人間にあらわにするように強いることはできないが、しかしそれを示し、阻止し、規制することはできるだろう。ちょうどそう思えたように。かくして人間にとって何らかの支えを見つけるか用いること、それによってどの能力もすばらしく支えられ導かれるだろう。概念が作られたわけは知性を助けるためであって、事物の多様性に混乱しないようにするためである。注意深く述べることはまた別の人に属することである。意志の行為を最大限指導するために、どのようにして確かな種類の属性が事物と自然な運動に課せられるべきか、我々はそのことを識別すべきである。そこから人間の行為にある調和が帰結するだろう。そしてあるすばらしい適正さと秩序が人間生活を飾ることになるだろう。この属性は道徳的(精神的)存在と呼ばれる。なぜなら人間の習俗と行為がそれにあわせて遂行され、それによって規制されるからである。そしてそれにより人は、粗野な野獣の単純さとは違う性格と外観を身につける。

注

- 1) 第1章。キケロー『キケロー選集10』永田康昭・兼利琢也・岩崎務訳、岩波書店、2000年、162ページ。
- 2) 同書、第3巻第2章、162ページ。ここで「それは」といわれているのは、キケローの前の文章をうけていて、「農耕のようによそ優雅な洗練から程遠い技術でも、扱う対象に新奇な名前をつけている」（同ページ）を指す。
- 3) マルクス・マニリウス『占星術または天の聖なる学』（ヘルメス叢書6）有田忠郎訳、白水社、1978年、133ページ。